

# アーネスト・サトウ『会話篇』における 人を指すことば

兪 三 善

## 1. はじめに

本稿はアーネスト・サトウ『会話篇』（1873）における人を指すことばを考察した。同書はイギリスの外交官・日本学者であるサトウによって横浜で刊行された日本語学習書である。この教材には人を指すことばが多く用いられ、相手との関係による使い分けが行われている。

『会話篇』の人を指すことばには、小島（1972）、古田（1974）、飛田（1974、1992）、常盤（2015）ほかの調査がある。調査は人称代名詞、特に1人称と2人称代名詞が中心である。ところが、『会話篇』には3人称代名詞はもちろんのこと、指示代名詞や呼びかけに使う名詞などが使われており、その数は、むしろ人称代名詞を上回るほどである。

また先行研究では『会話篇』に収録された日本語が武士階級のことばを反映したものとする<sup>1)</sup>。しかし、『会話篇』には使用人、小使い、人足、按摩のような人々も登場し、「わしゃ」「おいらあ」「あんた」「てめい」「あいつ」のようなことばが飛び交うことが多く、先行研究の見解とサトウが収録した文例が符合しないように見受けられる。そこで、本稿では『会話篇』の人称代名詞をはじめとする人を指すことばを検討することにした<sup>2)</sup>。

## 2. 調査の概要

『会話篇』における人を指すことばは大きく分けて代名詞と一般名詞からなる。代名詞には人称、指示、不定称が含まれており、一般名詞には人の身分や職業名、親族名称、人名がある。これらの調査においては、現代語と異なる用

(2)

法があることを勘案し、『会話篇』のPART II (EXERCISE VI. 22. Omaeの項)の注解と英語訳に準拠した。特に『会話篇』PART IIには当時の人称代名詞を人称別に整理したリストと注解が掲載されており、本稿の「代名詞」の調査に大変役に立った。一般名詞は『会話篇』の英語訳を参照して抽出した。その上、『日本国語大辞典 第二版』(以下『日国』と記す)の品詞の記載に従って代名詞と一般名詞であることを再確認し、本稿の調査対象としている。なお、人を指すことばに関連する事項は『日本語文法大辞典』の解説を参考にした。

以上のような手順を踏まえながら、『会話篇』から86種(297回)の人を指すことばを抽出することができた。抽出した人を指すことばの実例と個々の出現数は次節で示す。

以下、3節では人を指すことばの全体像を品詞別と人称別で紹介する。続く4節では1人称の実態を明らかにする。5節では2人称、6節では3人称について検証する。最後の7節は総括とする。

### 3. 『会話篇』における人を指すことばの実体

この項では人を指すことばの全体像を品詞別と人称別で紹介する。本稿の調査で得た86種、延べ297回の人を指すことばを品詞で整理したものが表1である。

表1 人を指すことばの実体

品詞		A. 用例数(種)	B. 使用数(回)	A(B)の合計
代名詞	① 人称	31	133	37種(151回)
	② 指示	4	8	
	③ 不定称	2	10	
一般名詞	④ 身分・職業名	33	117	49種(146回)
	⑤ 親族名称	6	9	
	⑥ 人名	10	20	

まず表1の「A(B)の合計」の欄によれば、僅差であるが、一般名詞の数が代名詞を上回る。個別的には①人称代名詞と④身分・職業名が肩を並べる。④⑤からは当時の多種多様な人々の生活臭が伝わってきて興味深い。なお、②から⑥までの調査報告はこれまで出されておらず、本稿が初めてであろう。

次に、人を指すことばの人称別の使用状況は表2のとおりである。( )中の数字は使用数(以下同じ)である。

表2 人称別使用状況

人称の種類	A. 代名詞	B. 一般名詞	A (B) の合計
1 人称	17 種 (71 回)	該当例なし	17 種 (71 回)
2 人称	13 種 (50 回)	22 種 (59 回)	35 種 (109 回)
3 人称	12 種 (28 回)	33 種 (89 回)	45 種 (117 回)

表2の「代名詞」の欄を見ると、1人称は17種(71回)、2人称は13種(50回)、3人称が12種(28回)と1人称から3人称へ向かうにつれてその数が減少する。それに対して、「一般名詞」は、1人称は該当例なく、2人称は22種(59回)、3人称が33種(89回)と2人称から3人称へ向かうにつれてその数が増えていく傾向がみえる。そこで、1人称、2人称、3人称に如何なることばが採択され、どれぐらい出現し、どのように使われているかを考察する。では、1人称から見ていこう。

#### 4. 1人称の実態

1人称、すなわち話し手自身を指すことばは、上記の表2の「A (B) の合計」の欄で示したとおり、17種(71回)が確認されている。それを品詞と語種で整理すると、表3のようになる。表に記す用例は必ずしも五十音に従うわけではない(以下同様)。

表3 1人称の品詞・語種

品詞・語種		用例
人称代名詞 (15種)	和語(11種)	わたくし、わたくしども、わたし、わたしら、わし、わしゃ、おれ、おいら、おいらあ、てまえ、みな
	漢語(3種)	じぶん、ぼく、せっしゃ
	混種語(1種)	このほうども
指示代名詞(2種)		こちら、こっち

表3を見ると、全体としては人称代名詞の数が目立つ。各品詞に属することばの内訳は、まず人称代名詞には和語と漢語と混種語の3種が使われている。和語が11種で、漢語は「じぶん」「ぼく」「せっしゃ」の3種、混種語は「このほうども」の1種である。和語はバラエティに富み、町人が口にしそうな変化形も積極的に選択されている。一方、武士のことばの「ぼく」「せっしゃ」も収録されていて、『会話篇』の日本語は武士のことばを反映しているという

先行研究の見解と符合する。個別的には「じぶん」「ほく」「せっしゃ」の出現が注目される。「じぶん」は再帰人称代名詞（再帰代名詞）とサトウが称するもので、先行研究では取り上げられていない。さらに「じぶん」と「ほく」は『会話篇』と同時期に刊行された日本語会話書<sup>3)</sup>には収録されていない。ちなみに「せっしゃ」は『捷解新語』（康遇聖：1676）の用例が初出であるが、『会話篇』を除く洋学会話書には出現していない。

指示代名詞は「こちら」「こっち」の2種である。

では、これらの1人称が『会話篇』にどれくらい出現するかを、用例数の多い代名詞を中心に検討してみよう。

#### 4-1. 1人称代名詞の用例ごとの使用数

1人称代名詞と指示代名詞の出現を、用例ごとの使用数で整理したものが表4である。

表4 1人称の代名詞の用例ごとの使用数

用例	使用数	用例	使用数
わたくし	33回	このほうども	2回
おれ	6回	わし	2回
わたくしども	5回	おいらあ	1回
こちら	4回	ほく	1回
おいら	3回	せっしゃ	1回
わたし	3回	みな	1回
てまえ	3回	わしゃ	1回
こっち	2回	わたしら	1回
じぶん	2回		

代名詞の用例ごとの使用数においては「わたくし」が最上位である。これは2人称「あなた」に対応する。2位の「おれ」はサトウの下層階級の間で用いられるという注解付きである。3位の「わたくしども」は「わたくし」の複数形であるが、単数として用いられる。4位の「こちら」は指示代名詞の一例である。5位は「おいら」「わたし」「てまえ」の3種である。「おいら」は「おれら」とともに「おれ」の複数形であるが、『会話篇』では「おれら」よりもむしろ砕けた言い回しの「おいら」が選択されて、「おれら」は確認されない。そして、「わたし」の場合、現代語においては「わたくし」よりも使用頻度が高いことから考えると、1位の座を「わたくし」に譲っているのは興味深い。

1 人称として出現している「てまえ」も注目される。6 位は「こっち」「じぶん」「このほうども」「わし」の 4 種である。最後の 7 位は「おいらあ」「ぼく」「せっしゃ」「みな」「わしゃ」「わたしら」の 6 種で、それぞれ 1 回ずつ提示されている。「おいらあ」は「おいらは」の融合形である。

以上の代名詞の使用分布において、特に注目される点は「わたくし」の使用が突出している反面、「わたし」の出現が少ないことである。すなわち『会話篇』の中では「わたくし」が「わたし」に対して優位である。そこで、1 人称の使用において、なぜこのような傾向が見られるのかを検証する。

## 4-2. 1 人称の体系

人称代名詞は話し手と聞き手との関係によって、自分や相手を示すことが変わることに着目し、1 人称を相手との関係に基づいて、自分から見て目上か、同輩か、目下かで整理したものが、次の表 5 である。

表 5 1 人称の体系

人間関係	用例
目上と同輩	わたくし、わたくしども、わたし、わたしら、てまえ
目上と目下	こちら
同輩と目下	わし、わしゃ、おいら、おいらあ、じぶん
同輩のみ	ぼく、みな
目下のみ	おれ、せっしゃ、こっち、このほうども

表 5 のとおり、全体としては 1 人称の体系は【目上と同輩】【目上と目下】【同輩と目下】【同輩のみ】【目下のみ】の 5 段階がある。そして、1 人称は同輩以上よりも同輩や目下に多く使われることが読み取れる。

以下、これらの 1 人称が出現する例文<sup>4)</sup>を用いて具体的な用法を紹介する。その際は、同じ用法で「わたくし」と「わたくしども」のように単数形と複数形がある場合はどちらかの例文を 1 つあげる。表記も「わたくし（ども）」とする場合がある。

【目上と同輩】に対しては、「わたくし」「わたくしども」「わたし」「わたしら」「てまえ」の 5 種が用いられている。まず「わたくし（ども）」の場合は、目上に対しては次の例文（1）のように使用人が主人（Gentleman・Master）に対して使う。例文中に提示されているように「わたくし（ども）」は 2 人称「あなた」に対応する。

(6)

- (1) (前略). これから にづくり を いたしまししょう が, からしり の ほう  
は わたくしども の にもつ と あなた の おやぐ を つかえましよう.

(EX17-8)

- (2) いえ, いろいろ ご ちそう に あずかりまして わたくし こそ かえつ  
て. こんにちは よう お はやく おでかけ なさいました. (EX16-7)

そして、同輩に対しては上記の (2) のとおり、面識のある知人同士に使われている。この「わたくし」の用法について、サトウは PART II (EXERCISE VI. 22. Omae の項)において、次のように述べている。引用する注解は櫻井(2010)による日本語の訳文である。

「わたくし」は、厳密には目上の人に対してのみ用いられるべき語であるが、同等の者との交際において[I]の意味として最もよく用いられる。それは、同等である相手をあたかも一段目上の人であるかのように扱うという日本の習慣に従っているためである。

この注解から、「わたくし」の用法が現代語「わたし」の領域まで広がっていることが読み取れる。この使用範囲の広さが33回という最多の使用数を獲得させたようである。

続いて、「わたし(ら)」も下記の (3) のように目上に、(4) のように同輩に用いられる。同輩以上に用いられる点では上記の「わたくし(ども)」と同じである。

- (3) いいえ. わたし の かんじょう では しじっけん ちがいます.

(EX11-32)

- (4) それは まあ, あんた は けっこう な こと で ございます; いやもう,  
わたしら は だした もの ま で やけて しまいました. (EX12-30)

ただ、上記の (4) のように「わたし(ら)」は砕けた感じの「あんた」に対応することや女性が多用するというサトウの説明から、「わたくし」に比べると相手に対する謙遜の敬意が下がっているように見受けられる。

最後に、「てまえ」の場合、目上には下記の (5) のように宿引きがお客の使用人(きさぶろう)に対して使う自称である。

- (5) (前略). こんばんは てまえ かたへ おうせつけられ くださいます  
 ように どうか. (後略) (EX18-63)
- (6) おたくは ごふしんが あたらしゅう ございます から こう ふって  
 も ごしんぱいは ございせんが、てまえ たくなどは、ふるい  
 い えの せいか して、あっち こっちが もって かないません. (後略)  
 (EX23-48)

上記の(6)では武士同士の会話に使われている。「てまえ」といえば、2人称を思い浮かべるが、『会話篇』にはへりくだった1人称として収録されている。

【目上と目下】に対しては、「こちら」が使われている。例文(7)では「ごさた」や文末の「いたしましょう」という敬体から目上に対する自称と見なされる。

- (7) ごさた あり しだいに こちら で とりはからい いたしましょう.  
 (EX8-16)
- (8) いまに こちら から さた を する から、それまでは ひかえている  
 が いい. (EX17-27)

上記の(8)は文末が常体であることから目下に対する1人称と考える。身分や年齢に関係なく使える点では中立的な立場の言い方である。

【同輩と目下】に対しては、「わし・わしゃ」「おいら・おいらあ」「じぶん」が使用されている。まず「わし・わしゃ」の使用例を3つあげる。

- (9) わし は よる ところ がある から、これ から お わかれ もうします.  
 (EX12-37)
- (10) わし の さた が ない うち に じぶん ひとりの かんがえ で やっちゃ  
 いかない. (EX8-22)
- (11) わしゃ そう いっても しょうち し や しますまい. (EX7-35)

上記の(9)の「わし」は上級商人や武士階級に属する人々同士が使った1人称である。(10)(11)は主人が尊大な態度で小使いに使った例である。

続いて「おいら・おいらあ」は下層階級の間で用いられるという注解付きの語である。下記の(12)では同輩に、(13)では目下に使われている。

(12)なん だ、かたくるしい。 おいら の うち え きたら ずっと おとおり  
なさいな。 そんな に あらたまつて、たにんがましい。 (EX25-17)

(13)てめい やどひき か おいらあ いつも しもだや へ とまるん だ から  
いけねい。 (EX18-62)

同輩同士の会話の文末が目下と同様に常体であることから、敬意はないものの親愛の情を込めて使っているように見受けられる。

引き続き、「じぶん」は1人称としては2回現れる。下記の(14)の「じぶん」は同輩、(15)では目下に対しての使用である。用法としては「てまえ」や「おれ」に近い。

(14)いえ、じぶん の て だ か、なん だ か、おぼえ の ない よう です。(後  
略) (EX22-60)

(15)なに、 こんど は じぶん の よう で、 それ に いそぎ の たび でも  
なし するから、(後略) (EX18-3)

【同輩】に対しては「ぼく」「みな」の2種が用いられている。「ぼく」は下記の(16)のように私的な場面で同輩に使用されている。話者は武士階級の人で公用の旅に際し、知人に家族の見守りを依頼する場面での使用である。

(16)さて ぼく も きんじつ おおざか へん まで ほっそく いたします。 つ  
きまして は るす ちゅう かない ども を なにぶん どうか。  
(EX25-27)

大切な依頼をするという立場上、謙譲語が求められる場で、相手に対する敬意が非常に高い1人称となっている。

続いて「みな」は複数1人称「We」で英訳され、次の(17)の外国領事と日本の役人との会話に現われる言い方である。

(17)しかしながら おくに の あきんど は この く に では すべて しょう  
じき な もの だ と ばかり、 みな き を ゆる して おる ゆえ そんな こ  
と に き が つ かなか った か も しれ ませ ん の さ。(後略) (EX21-6)

「みな」は現代語の「われわれ」の用法に近いが、『会話篇』には「われわれ」



は収録されていない。

【目下】に対しては「おれ」「せっしゃ」「こっち」「このほうども」の4種が使われている。ここでは「せっしゃ」と「こっち」の使い方だけを紹介する。まず、「せっしゃ」は下記の(18)のように使用人(きさぶろう)が脇本陣の女中に使用した例である。

(18)なに、なに。だんなはげこでいらっしゃるからおさけはちっと  
もめしあがらない。しかしせっしゃはすこしもちいるから、のう、  
あとでここへばかりはしとつちょうしをつけてきてくんな。

(EX17-30)

元来「せっしゃ」は、主に武士やサムライなどが自分のことを謙って使用する言い方であるが、この会話では女中に対してかつて武士であった自分を誇示しようとする意図が認められる。きさぶろうは会津若松の武士だった野口富蔵と見なされ(cf. 国米：2013)、サトウからサムライ中のサムライと称賛される人物である。

最後に、「こっち」は「こちら」が目上にも使用されているのに対して、目下にのみ使用されている。

(19)なに!こっちのかってでひまをだすことだから、きゅうきんの  
かしこしもあるけれど、それはかえすにおよばない。(EX14-17)

「こっち」の使用人は上記の(19)のように主人(Gentleman・Master)で、自称として「おれ」(EX14-15)も使うことから、ここでは「おれ」や「じぶん」の用法に近い。

さて、ここまでが1人称の使い方の検討である。同輩以上には「わたくし(ども)」「わたし(ら)」「てまえ」「こちら」の6種(複数形を含む)が使われ、同輩以下には「わし」「わしゃ」「おいら」「おいらあ」「じぶん」「ぼく」「みな」「おれ」「せっしゃ」「こっち」「このほうども」の11種が使われている。そのうちの「わし」「じぶん」「ぼく」「おれ」「こっち」の5種は主人(Gentleman・Master)が私的場面で使用人や下僕に使う自称であった。

以上、『会話篇』における自分を指すことばを品詞・語種、使用数、体系において考察した。最も興味深い点は、現代語においては使用頻度が高い「わたし」が、『会話篇』では使用数1位の座を「わたくし」に譲っていることである。

その理由として、①「わたし（ら）」は砕けた感じの「あんた」に対応しており、「わたくし」よりも敬意の意が下がっていること、②敬意の度合いが下がっている中で目上には使いづらいこと、③女性が多用するという性別に拘束されていること、④『会話篇』には女性の話者が少ないことがあげられる。要するに、当時の「わたし」は「わたくし」の用法にまだ追いついていなかったため、首位の座を奪われているようである。それではこの辺で、次の調査対象となる2人称の検討に移りたいと思う。

## 5. 2人称の実態

『会話篇』には上記の3節の表2の「A (B) の合計」の欄で示したとおり、35種（109回）の聞き手を指すことばが用いられている。それを1人称と同様に品詞と語種で整理したものが表6である。

表6 2人称の品詞・語種

品詞と語種		用例
人称代名詞（12種）	和語（10種）	あなた、あんた、おたく、おまえ、きみ、てまえ、てめい、てめ、みな、みなさま
	漢語（2種）	きさま、じぶん
不定称代名詞（1種）		だれか
一般名詞（22種）	身分・職業名（16種）	おさん、おやかた、ごしゅじん、こぞう、せんせい、だんな、だんなさま、だんなさまがた、ねえさん、しくやくにん、ていし、かごや、かごやさん、わかいし、にんそく、やどひき
	人名（6種）	おちあいひさしさん、つるぎわうじ、はやみさん、きさぶろう、きちすけ、とらきち

表6によれば、全体的には「人称代名詞」よりも「一般名詞」の2人称が倍近く多い。各品詞に属することばの内訳は、まず「人称代名詞」には和語と漢語が使われている。具体的には和語が10種で、漢語2種であり、和語が主流である。次に不定称代名詞は「だれか（one of you）」のみである。1人称にみえる指示代名詞は確認されなかった。なお、2人称のうちの「あんた、おたく、きみ、てめい、てめ、じぶん、みな、みなさま」の8種は『会話篇』と同時期に刊行された日本語会話書には出現していない。

「一般名詞」の2人称には身分・職業名と人名がある。前者は16種、後者は6種である。身分・職業名は1人称に比べて10倍近く増えている。

では、2 人称の品詞や語種において、なぜこのような傾向がみられるのかを検証してみよう。2 人称の使用状況から原因を探り、それがどれくらい使用されているかを代名詞と一般名詞に項を分けてみることにし、代名詞から取り上げる。

### 5-1. 2 人称の代名詞の用例ごとの使用数

2 人称代名詞と不定称代名詞の出現を用例ごとの使用数で整理したものが表 7 である。

表 7 2 人称の代名詞の用例ごとの使用数

用例	使用数	用例	使用数
あなた	16 回	きみ	2 回
てめい	6 回	じぶん	2 回
だれか	6 回	おたく	1 回
てまえ	5 回	てめ	1 回
きさま	4 回	みな	1 回
おまえ	3 回	みなさま	1 回
あんた	2 回		

代名詞の用例ごとの使用においては「あなた」が最上位である。「わたくし」に対応する呼称である。それぞれの人称において最上位である点で並び立つ。2 位は「てめい」「だれか」である。「てめい」はサトウから野卑な言い方と言われながらも上位入りしている。「だれか」(one of you) は主人が下僕を呼ぶときに用いることばである。3 位は「てまえ」、4 位は「きさま」である。5 位の「おまえ」は下層階級の間で用いられるというサトウの注解付きの語である。6 位は「あんた」「きみ」「じぶん」の 3 種である。ぞんざいな感じを伴う口語「あんた」や 2 人称としての「じぶん」の収録は興味深い。最後の 7 位は「おたく」「てめ」「みな」「みなさま」の 4 種類である。

以上の代名詞の使用分布において注目される点は「あなた」の使用が目立つこと、2 人称の代名詞は「あなた系」(あなた・あんた)と「てめい系」(てめい・てまえ・てめ)が主流であること、高圧的・敵対的とも取れる「てめい系」や「きさま」が出現していることである。では、実際に 2 人称の使われ方と、このような傾向の関係について、次項で検証してみよう。

## 5-2. 2人称の体系

2人称代名詞の使い方も1人称同様、人間関係に基づいて整理すると、表8のようになる。

表8 2人称の体系

人間関係	用例
目上と同輩	あなた
同輩のみ	あんた、おたく、きみ、みなさま
目下のみ	おまえ、きさま、じぶん、てまえ、てめい、てめ、みな

表8のとおり、2人称の体系は【目上と同輩】【同輩のみ】【目下のみ】の3段階だけである。1人称にみえる【目上と目下】【同輩と目下】に対する使用例は確認されなかった。個別的には「同輩」から「目下」に向かってことばが増えていくことが読み取れる。以下、実際の使われ方を例文から確認してみよう。

【目上と同輩】に対しては「あなた」が使われている。目下に使われた例は確認されなかった。目上に対しては、下記の(20)のように使用人が主人に対して使った例がある。

(20)(前略). これから にづくり を いたしましょう が、からしり の ほう  
は わたくしども の にもつ と あなた の お やぐ を つかえましょ  
う。(後略) (EX17-8)

(21)わたくし は おいかなで そう でも ありません が、あなた は あい  
にく むかい かなで たいへん で いらっしゃいますなあ。(EX23-27)

上記の(21)では武士または教養のある人が同輩の知人に対して使っている。2つの例文には「あなた」の対が「わたくし」であることが示されている。ところで、上記の(20)の会話は使用人と主人とのやり取りであり、主従関係からすると「あなたさま」が使われるのが普通であろう。そこで、「あなた」が使われた2つの会話の内容と文末表現に目を向けると、丁寧でありながらも仰々しくない話し方や文末も婉曲の表現が対応する。こうした傾向から、たとえ目上であっても心理的に距離が近い関係であるために、丁重さの高い「あなたさま」が選択されなかったように思われる。また「あなた」は目下には使われないことから、当時の「あなた」は現代語よりも敬語の意が強かったことが察せられる。

【同輩】に対しては「あんた」「おたく」「きみ」「みなさま」の4種が用いら

れている。ここでは前者の3種の用法を紹介する。「あんた」は上記の「あなた」のくだけた言い方で、下記の(22)では「わたし(ら)」の対で使われている。

(22)それはまあ、あんたはけっこうなことでございます；いやもう、  
わたしらはだしたものでやけてしまいました。(EX12-30)

続いて、「おたく」は相手や相手の家庭を敬つていうのに使われている。自分の家族を卑下するというときは「かないども」や「かないのもの」が使用されている。

「きみ」は紳士や書生の間で使用するとサトウが説明しているとおり、下記の(23)のように品のよい物腰のやわらかい会話に現われている。

(23)きみのおぼしめしはいかがでございます。(EX10-50)

同輩に使われた4種が現われる会話の文末は丁寧体が対応しており、これはサトウの「同等である相手をあたかも一段目上の人であるかのように扱うという日本の習慣に従っているためである」という説明と符合する。

【目下】に対しては「おまえ」「きさま」「てまえ」「てめい」「てめ」「じぶん」「みな」の7種が使用されている。「おまえ」はサトウによれば下層階級によって用いられることばであるだけに、高圧的でぞんざいな呼称(EX9-4)として使われている。続いて、「きさま」は4回現れるが、そのうちの2回は次の(24)のように相手を見下したり、ののしったりする調子で用いる。ここでは番頭が若い小使いに対して使っている。

(24)いまめのまえてうそをいったんじゃないか。ああ!きさまのようなものにくちをきくとはらがたつ。(後略)(EX14-25)

(25)ああ！いいところもちだった。きさぶろう、きさまもどうだ。  
(EX19-18)

一方、他の2回は上記の(25)のように親しい気持ちで相手を指す呼称である。ここでは主人が信頼をおく使用人に対して用いている。

引き続き、「てまえ」と「てめい」は同じ話者が同じ聞き手に混用する場合もあるので、「てまえ・てめい」で記す。これらは主人が下僕や使用人に使っている。「てまえ・てめい」も「きさま」と同様に2通りの使い方をする。下

記の(26)(27)では相手を見下したり詰問したりする調子で用いる。

(26) てまえ の おやじ は よく たびたび わずらう なあ. また うそを いっ  
て あそび に でも いくん だらう. (EX14-4)

(27) これ, とらきち! てめい ゆうべ どこ へ いった. (EX14-19)

(28) きさぶろう, てめい に まだ は なさなかつた が きゅう な ごよう を  
おおせつかって らいげつ いつか には おおざか へ しゅったつ いた  
さなくて は ならない て. (EX17-1)

(29) きさぶろう, てまえ も つかれたらう. かご を とる が よい.  
(EX18-56)

一方、(28)(29)では親しい気持ちで相手を指す呼称である。(28)では言いにくいことを言うための前置きとして、(29)では親愛の情を見せるものとして用いている。詰問したり、親愛の情を見せたりする用法においては上記の「きさま」と似ているが、「きさま」は1人称にはなれないのに対して「てめい・てまえ」はなれるという点では違いがある。1人称に用いる場合は謙譲の敬語である。

最後に、「じぶん」は主人が小使いを指すのに使っている。「じぶん」も「てまえ」と同様に1人称に用いる場合は待遇表現であるが、2人称に用いる場合は軽卑表現に変わる。

以上、2人称代名詞について検討した。では、次の検討事項である一般名詞の2人称へ論を進めよう。

### 5-3. 2人称の一般名詞

一般名詞で相手を指すことばの使用状況は人名が6種(16回)、身分・職業名が16種(43回)ある。人名から見ていく。

#### 5-3-1. 呼びかけの人名

呼びかけの人名は「おちあいひさしさん」「つるざわうじ」「はやみさん」「きさぶろう」「きちすけ」「とらきち」である。「きさぶろう」が9回、「きちすけ」「とらきち」が2回ずつ、その他の人名が1回ずつ出現する。「きさぶろう」は使用人、「きちすけ」と「とらきち」は下僕として主人(Gentleman・Master)と近い距離にいる人物である。

これらの人名の形式は、「おちあいひさしさん」のようにフルネームに待遇

の接尾辞「さん」を付加したもの、「つるざわうじ」と「はやみさん」のように名字に待遇の接尾辞「うじ」と「さん」をつけたもの、「きさぶろう」のように人名の呼び捨ての3段階がある。「うじ」は通常用いる「さま」よりも硬い表現で、使用者は「サムライ」階級に限られるとサトウは説明している。待遇の接尾辞を伴うものは敬意を込めて同輩に使っているが、人名の呼び捨てには(30)のように罵倒・軽卑を示す場合と下記の(31)のように親愛の情を示す場合がある。

(30) これ、とらきち！ てめい ゆうべ どこ へ いった。 (EX14-19)

(31) きさぶろう、てめい に まだ は な さ な っ た が き ゅ う な ご よ う を  
お お せ つ か っ て ら い げ つ い つ か に は お お ざ か へ し ゅ っ た つ い た  
さ な く て は な ら な い て。 (EX17-1)

(30)の「とらきち」には怒りのこもった感動詞「これ」と、見下しの念が込められた「てめい」が前後に置かれ、主人の怒りの感情を増長する。(31)「きさぶろう」は、主人から大事な公用の旅のお供の依頼を受ける場面で使用された例で、親近感を込めた呼びかけである。『会話篇』において「きさぶろう」は主人に次ぐ主要人物である。『会話篇』では相手との距離の遠近に基づく3段階の呼びかけの人名を提示するとともに、呼び捨ては場合によって軽卑や罵倒にも用いられることを示している。

それでは、呼びかけに用いられた身分・職業名の特色を探ってみよう。

### 5-3-2. 呼びかけの身分・職業名

呼びかけの身分・職業名を用例ごとの使用数でまとめたものが、次の表9である。

表9 2人称の身分・職業名ごとの使用数

用例	使用数	用例	使用数
だんな (さま・さまがた)	18 回	わかいし	2 回
にんそく	5 回	おさん	1 回
ねえさん	4 回	おやかた	1 回
しくやくにん	3 回	ごしゅじん	1 回
かごや (さん)	2 回	やどひき	1 回
こぞう	2 回	せんせい	1 回
ていし	2 回		

2 人称の身分・職業名の用例ごとの使用においては「だんな(さま・さまがた)」が1位である。単独では「だんな」が14回、「だんなさま」「だんなさまがた」が2回ずつである。「だんな」の主な使用者は武士の公用と私用の旅に雇われた人足や宿役人や宿引きたちである。相手はかれらを取りまとめる武士の使用人のきさぶろうである。一方「だんなさま」は下僕や使用人が主人に対して用い、「だんなさまがた」は宿役人や宿引きが主人一行に対して使う。身分と立場によって使い分けが行われている。2位の「にんそく」は3人称としても21回現われており、本稿のキーワードの一つである。3位の「ねえさん」は「おねさま」の転訛で、本来血縁関係を対象とする言い方であるが、『会話篇』では4回とも宿の女中を指すことばとして出現する。4位の「しくやくにん」は宿駅の主人やその補佐役たちに与えられた官職名である。その補佐役には帳付・馬指・人足指などを加える場合が多く、また、名主・組頭・百姓代など地方役人を含めることもまれではなかったようである<sup>5)</sup>。5位は「かごや(さん)」「こぞう」「ていし」「わかいし」の4種である。注目される呼びかけは「かごや」と「かごやさん」で、同一人物に呼び捨てと「さん」づけを混用するためである。「かごやさん」の使用者は、普段は目上の立場で「かごや」から「おやかた」(EX18-64)と呼ばれる人物であるが、次の(32)のように相手が目下であっても客側に就く場合は客の一人としての待遇をする。利害が絡む相手に対する呼称の一例である。

(32) こんばん は てまえ かた へ おうせつけられ くださいます よう に どう  
うか、 けっして お そまつ に は つかまつりません から、 なにとぞ。  
おい、 かごやさん、 どうぞ だんな へ お すすめ もうして くんなさい  
な。 (EX18-63)

最後の6位は「おさん」「おやかた」「ごしゅじん」「やどひき」「せんせい」の5種である。まず「おさん」は「おさんどん」とも言い、あらゆる台所の女中の総称である。そして「おやかた」と「やどひき」は宿役人、またはその補佐役たちに対する呼称である。

以上、『会話篇』における2人称を品詞、語種、使用数、体系において考察してきた。全体的特色として、次の6点をあげておく。

第1に、代名詞の使用は漢語と混種語より和語が多く使われている。『会話篇』の場合、21章の外国領事と日本の役人との会話、また25章の多くの侍の自己紹介・訪問・辞去の挨拶などの会話に文語的言い方が多い事を考えると、和語



が多いということから町人・職人のことばもサトウが求めている日本語であったことがうかがえる。

第2に、代名詞の使用は「あなた系」(あなた・あんた)と「てめい系」(てめい・てまえ・てめ)が主流である。一般名詞は「だんな」と「にんそく」が上位である。

第3に、2人称代名詞のほとんどは同輩か目下に用いられている。同輩以上に使われるのは「あなた」のみである。これは、敬意の対象となる相手を代名詞で呼ぶのは不作法であるためのものである。『会話篇』では目上の相手を一般名詞の2人称「だんな」「だんなさま」「だんなさまがた」「おやかた」「ごしゅじん」「せんせい」で呼びかけており、これらの身分・職業名は代名詞の不都合を補う役割をしているものとする。なお、「あなた」が使われる目上は話し手と心理的に距離が近い人で、軽く敬意をこめた呼びかけとなっている。

第4に、目下に使われる「きさま」と「てまえ・てめい」は軽卑や罵倒の意と親愛の情で相手を指しており、現代語にみるような敵対的な意味ばかりでない。両方の用法が保たれていたために使用数が多かったものとする。

第5に、「じぶん」と「てまえ」は1人称でも2人称でも用いられ、双方とも1人称のときは待遇表現で、2人称のときは軽卑表現に変わる。

第6に、サトウから野卑な言い方、または下層階級の用法と注解された「てめい」や「おまえ」が『会話篇』の日本語として選ばれている。

さて、これからは最後の検討事項である話し手と聞き手以外の第3者を指すことばの実態を探ることにしたい。

### 6. 3人称の実態

話し手と聞き手以外の第3者を指すことばも1人称と2人称と同様に代名詞と一般名詞があった。前者が12種、後者が33種で、一般名詞の3人称が2倍以上多くなっている。代名詞の3人称から具体的に見ていこう。

#### 6-1. 3人称の代名詞

代名詞による3人称は表10のとおりである。まず、品詞においては人称代名詞が9種、指示代名詞が2種、不定称代名詞が1種である。3人称も1人称・2人称と同様に人称代名詞が多いことには変わりがない。

表 10 3 人称の代名詞の実態

品詞		用例
人称代名詞 (9 種)	和語 (2 種)	あいつ、みな
	漢語 (3 種)	きにん、じぶん、とうにん
	混種語 (4 種)	あのひと、あのおとこ、あのおんな、このもの
指示代名詞 (2 種)		あれ、これ
不定称代名詞 (1 種)		だれ

ただし、3 人称代名詞の語種においては漢語と混種語が目立つ。両者合わせて 7 種類で、初めて和語の数を上回る。特に「あのひと」「このもの」のような混種語が 1 人称よりも増えている。ちなみに 1 人称の混種語は 1 例のみ、2 人称は確認されなかった。

では、3 人称代名詞が『会話篇』にどれぐらい使われているかを確認してみる。それを用例ごとの使用数で整理したものが表 11 である。

表 11 3 人称代名詞の用例ごとの使用数

用例	使用数	用例	使用数
とうにん	11 回	あいつ	1 回
だれ	4 回	あのおんな	1 回
あのひと	2 回	あれ	1 回
じぶん	2 回	このもの	1 回
みな	2 回	これ	1 回
あのおとこ	1 回	きにん	1 回

3 人称代名詞の用例ごとの使用数においては「とうにん」が最上位である。当該の人の意味で「きにん」とともに漢語使用の一例である。『会話篇』の 21 章の外国領事と日本の役人との会話に現われることばで、主に外国領事が用いる。2 位は不定称代名詞「だれ」である。3 位は「あのひと」「じぶん」「みな」の 3 種である。『会話篇』では「じぶん」の 1 人称、2 人称、3 人称、不特定の 4 つの用法が一堂に会するため、「じぶん」(his) の出現は注目したい。具体的には 1 人称として 2 回 (my own)、2 人称が 2 回 (you・your own)、3 人称が 1 回 (his)、不特定が 1 回 (one's own) である。現代の言い方に先行する「じぶん」の用法が見受けられる。最後の 4 位は「あのおとこ」「あいつ」「あのおんな」「あれ」「このもの」「これ」「きにん」の 7 種である。この中の「あいつ」は強い軽蔑の意を伴うとの注解付きの語である。

以上が代名詞による 3 人称の実態である。では、本稿の最後の検討事項である一般名詞の 3 人称について検討する。

## 6-2. 3 人称の一般名詞

3 人称の一般名詞には表 12 のように、人名と家族名と身分・職業名がある。家族名は 1 人称と 2 人称には現れず、3 人称から出現する。3 人称にも、2 人称と同様に多種多様な人々と職業名が収録されている。

表 12 3 人称の一般名詞

種類	用例
人名 (4 種)	まんねんうじ、ちょうさん、そうけつ、まんねんかめのすけ
家族名 (6 種)	おやじ、こども、かない、かないども、かないのもの、ごしそく
身分・職業名 (23 種)	おかみ、おかみさん、あきんど、あんま、いしゃ、おきやく、うけにん、こずかい、ごしゅじん、しゅじん、さむらい、しくやくにん、ししょう、しょうにん、せんせい、だいく、だんな、だんなさま、だんながた、とびのもの、にほんじん、にんそく、ほく

各項目別の用例数は、まず人名が 4 種類で、「まんねんうじ」「ちょうさん」のような名字に待遇の接尾辞「うじ」と「さん」をつけた例と「そうけつ」「まんねんかめのすけ」人名の呼び捨ての 2 段階である。

家族名は複数を含めて 6 種である。「ごしそく」を除く、「おやじ」「こども」「かない」「かないども」「かないのもの」は身内を指す謙譲語である。そして「かない」「かないども」「かないのもの」の使い方に注意が払われている。「かない」は my wife、「かないども」は my wife and family、「かないのもの」は my people と英語に訳されている。ただ「かないのもの」は実際の例文では下僕を指す。「ごしそく」は 25 章の社交辞令の会話に現われる相手の息子を指す硬い言い回しである。

身分・職業名は 23 種類で、先述した 2 人称の用例数と使用数を上回る。そこで、3 人称の身分・職業名が『会話篇』にどれぐらい使われているかを確認してみる。それを用例ごとの使用数で整理したものが表 13 である。

表 13 3 人称の身分・職業名ごとの使用数

用例	使用数	用例	使用数
にんそく	21 回	だいく	2 回
だんな（さま・がた）	15 回	とびのもの	2 回
あきんど	6 回	おかみさん	1 回
あんま	4 回	いしゃ	1 回
（ご）しゅじん	4 回	おきやく	1 回
ししょう	3 回	こずかい	1 回
しょうにん	3 回	さむらい	1 回
せんせい	3 回	しくやくにん	1 回
うけにん	3 回	ぼく	1 回
おかみ	2 回	にほんじん	1 回

3 人称の身分・職業名は「にんそく」が最上位である。この呼称は 2 人称にも現われており、当時の人々の移動にいかにも重要であったかを知る例である。2 位の「だんな（さま・がた）」は 2 人称にも使われており、本稿のキーワードの一つである。3 位は「あきんど」で、漢語の「しょうにん」も 3 回出現する。これらのことばも「とうにん・きにん」と同じく 21 章の外国領事と日本の役人との会話に現われることばである。4 位は「あんま」「（ご）しゅじん」の 2 種である。「あんま」は旅の疲れを取るために主人が利用する。主人は道中のすべてのことを使用人（きさぶろう）に任せきりで直接交渉することはないが、この「あんま」にだけ「そうか；きょうはよほどあるいたせいかくたびれた。どうぞしとつもんでくんな」（EX19-17）と声をかける。5 位は「ししょう」「しょうにん」「せんせい」「うけにん」の 4 種である。6 位は「おかみ」「だいく」「とびのもの」の 3 種である。「おかみ」は元首や領主といった主君に用いる丁重さが最も高い言い方であるが、『会話篇』では「しくやくにん」が主人を指すことばとして用いている。業界用語として使われていた可能性がある。最後の 7 位は、「おかみさん」「いしゃ」「おきやく」「こずかい」「さむらい」「しくやくにん」「にほんじん」「ぼく」の 8 種で 1 回ずつ使われている。

以上、3 人称を品詞、語種、使用数において考察した。全体的特色として、次の 6 点をあげておく。

第 1 に、3 人称の身分・職業名には武士階級、つまり江戸・東京の教養ある人々（士族）には該当しない使用人、小使い、人足、按摩のような人々も登場し、相手との心理的な距離や物理的な距離に配慮しながらことばのやりとりをしている。

第2に、「あいつ」「あれ」「これ」「このもの」のようなぞんざいな表現が目につく。

第3に、「にんそく」と「だんな（さま・がた）」の使用が目立つ。これは、前者は旅の交通手段の担い手として、後者は登場人物として重要であることの反映である。

第4に、『会話篇』ならではの呼びかけのことばとして、「にんそく」「やどひき」「かごや」があげられる。「にんそく」と「かごや」は『会話篇』以降の会話書では車夫という職業名に取って代わる。

第5に、『会話篇』では主人を指すのに「おかみ」「だんなさま」「ごしゅじん」「しゅじん」「だんな」の5種を使用している。

第6に、女性を指すことばが少ない。「かない」「かないども」「おかみさん」「あのおんな」の4種のみである。これは、『会話篇』に女性の話者が少ないことの表れと考える。

さて、本項では3人称の代名詞と一般名詞人について検討した。そろそろ、本稿が終わりに近づいてきたので総括をしたいと思います。

## 7. おわりに

『会話篇』における人を指すことばには大きく分けて2種類がある。ひとつは【代名詞】であり、もう一つは【一般名詞】である。まず【代名詞】においては「わたくし（ども）」「あなた」「てまえ（てめい・てめ）」「とうにん」「だれ（か）」「おれ」「じぶん」の出現が目立つ。そして、代名詞の体系においては2人称代名詞のほとんどが同輩か目下に用いられているのが特色である。同輩以上に使われるのは「あなた」のみである。これは敬意の対象となる相手を代名詞で呼ぶのは不作法であるためのようで、『会話篇』では目上の相手を「だんな」「だんなさま」「だんなさまがた」「おやかた」「ごしゅじん」「せんせい」のような一般名詞で呼びかけており、これらの身分・職業名は代名詞の不都合を補う役割をしているものと考ええる。

【一般名詞】においては身分や職業名が多く提示されている。使用数の多い呼称は「だんな（かた、さま、さまかた）」「にんそく」「しょうにん（あきんど）」「ししょう（せんせい）」である。「だんな（かた、さま、さまかた）」は『会話篇』の目上の主要人物に対する呼称である。「にんそく」の上位語入りは旅の交通手段の担い手として重要であることの反映と考える。

【人名】においては、「おちあいひさしさん」のようにフルネームに待遇の接

尾辞「さん」を付加したもの、「つるざわうじ」と「はやみさん」のように名字に接尾辞「うじ」と「さん」をつけたもの、「きさぶろう」のように人名の呼び捨ての3段階を提示している。「うじ」は通常用いる「さま」よりも硬い表現で、「サムライ」階級の間で使用されたようである。人名の呼び捨てが目下に対して使われているときは、軽卑・罵倒を示す場合と親愛の情を示す場合を示している。

【家族名】は「ごしそく」を除く、「おやじ」「こども」「かない」「かないども」「かないのもの」は身内を指す謙譲語として使う。そのうちの「かない」「かないども」「かないのもの」の使い方には注意が払われている。「かない」は my wife、「かないども」は my wife and family、「かないのもの」は my people と英語に訳されている。ただ「かないのもの」は実際の例文では下僕を指す。

『会話篇』の人を指すことばにおける特に興味深い点は、まず「わしゃ」「おいら」「おいらあ」「あんた」「あいつ」のように町人が口にしそうな語形も掲載していることである。もう一点は敬意の度合いが低い語も積極的に収録していることである。具体的には、下層階級の間で用いられるとの注解付きで「おいら」「おまえ」を用例として採択している。また野卑な言い方との説明付きで「てめい」を、強い軽蔑の意を伴うと言いながら「あいつ」を『会話篇』の日本語として選んでいるのである。したがって、『会話篇』の人を指すことばにおいては、教養ある上層の武士の話すことばのみならず、下層階級の間で用いられることばも積極的に採択されていることが読み取れる。すなわち、『会話篇』の日本語には当時の武士のことばと町人のことばが並び立っているのである。

なお、本研究は先行研究を踏まえ、『会話篇』における人を指すことばの検証に重点を置いたため、同時代に刊行された日本語会話書における位置づけまでは踏み込むことができなかった。これは今後の課題としたい。

## [注]

- 1) 小島 (1972 : p.52)、古田 (1974 : p.2)、飛田 (1977 : p.96) を参照した。
- 2) 筆者のサトウ『会話篇』に関する研究としては兪 (2015、2017、2019、2021) がある。兪 (2015) では言いさし表現を考察し、兪 (2017) では感動詞の諸相について論じた。兪 (2019) ではサトウ自身の回想録 (『一外交官の見た明治維新 [上・下]』) および日記、またサトウ関連の著作や同時期に日本で活躍していたオールコック、ブラウン、アストン、チェンバレンなどの日本および日本語に関する記録も踏まえながら日本語教育の教材としての側面と価値を検証し

- た。兪（2021）は、兪（2019）の続編というべきもので、視点を明治初期までの朝鮮、ロシア、英国、日本で出版された日本語会話書におき、対照という方法でそこに映し出される同書のディテールを評価の対象に加えたものである。
- 3) 次の①から⑦までの資料を指す。①『弘治五年朝鮮板伊路波』（1492）、②康遇聖『捷解新語』（1676）、③リギンズ『英和对訳会話書』（1860）、④ブラウン『会話日本語』（1863）、⑤オールコック『仏・英両語対訳、片仮名字・ローマ字による日常日本語対話集』（1863）、⑥チェンバレン『日本語口語入門』（1888）、⑦黒野義文『露和通俗会話篇』（1894）である。これらの書誌については兪（2021）を参照されたい。
  - 4) 本稿の引用文の原文はローマ字表記であるが平仮名で翻字をしている。すべての平仮名は現代仮名遣いである。日本文の引用文中の下線は筆者が付したものである。引用の際はEXERCISE（EX と略す）のナンバー、頁数、番号によって引用箇所を示す。
  - 5) 『日本国語大辞典 第二版〔全 13 巻〕の解説を参照にした。

### 〔主要参考文献〕

- 岡村和江（1972）「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 2 名詞・代名詞』明治書院：79-121.
- 国米重行（2013）『野口富蔵伝』歴史春秋社.
- 小島俊夫（1972）「会話編（E. Satow）にあらわれた江戸ことば」『国語国文』41（5）：41-53.
- 小松寿雄（2006）「会話篇に見る幕末の江戸語—音節融合を中心に—」『近代語研究』13：301-315.
- 坂田精一訳（1960）『一外交官の見た明治維新〔上・下〕』アーネスト・サトウ著、岩波書店.
- 佐久間 鼎（1951）『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣：1-76.
- 櫻井豪人（2010）「アーネスト・サトウ『会話篇』Part2 訳注稿」『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』8：1-18.
- 田中章夫（2004）「武士の公用社交用語」『近代語研究 12』武蔵野書院：203-211.
- 常盤智子（2015）「J. F. ラウダー著『日英会話書』の日本語—人称代名詞から—」武蔵野書院：155-167.
- 飛田良文（1974）「明治初期作品の敬語」『敬語講座〔5〕明治大正時代の敬語』明治書院：37-83.
- 飛田良文（1977）「英米人の習得した江戸語の性格」『国語学』108：77-96.
- 飛田良文（1992）「敬語—S. R. ブラウンの Colloquial Japanese から Prendergast's Mastery System へ」『東京語成立史の研究』東京堂：619-634.

- 飛田良文 (1992) 「英学会話書の人称語彙」『東京語成立史の研究』東京堂：144-161.
- 古田東朔 (1974) 「幕末期の武士のことば」『国語と国文学』51 (1)：1-13.
- 兪三善 (2015) 「アーネスト・サトウ『会話篇』における言いさし表現について」『実践國文学』88：左 224-201 (1-24).
- 兪三善 (2017) 「アーネスト・サトウ『会話篇』にみえる感動詞の諸相」『学習院大学：人文』16：163-181.
- 兪三善 (2019) 「日本語の教材としてのアーネスト・サトウ『会話篇』」『実践國文学』96：左 143-121 (24-46).
- 兪三善 (2021) 「日本語教材としてのアーネスト・サトウ『会話篇』—国内外の日本語会話書との対照から—」『実践國文学』99：左 85-58 (52-79).
- 『会話篇』東洋文庫：1967.
- 『日本国語大辞典 第二版〔全 13 卷〕』小学館：2000-2002.
- 『日本語文法大辞典』山口明穂・秋元守英編、明治書院：2001.

(ゆ さむそん・桐蔭横浜大学非常勤講師)